『1984年』のオーウェル

── 仕掛けられた謎を考える ──

難　波　勝　平

ーはじめにー

ここに一枚の絵があります。振り乱した髪、狂気に満ちた眼。そして恐ろしいことに、子供を頭から食いちぎっているのです。この絵、スペインの画家ゴヤが描いた「(我が子を食べる) サトゥールヌス」が私にとって、オーウェルの描く『1984年』の世界に思えてなりません。

私はこの小論のタイトルを「『1984年』のオーウェル」といたしましたが、ここで、この作品のねらい、その表現方法、そしてオーウェルがこの作品のなかで仕掛けたと思われる謎を考えることによって『1984年』の位置を明らかにしたいと思います。

1　作品のねらい

オーウェルは『1984年』(*Nineteen Eighty-Four*,1949) のねらいを、あちこちの手紙のなかで書いています。ということは「ねらい」を説明しなければならない情況がかなりあったことを意味します。アイザック・ドイッチャーが報告しています[1]が、アメリカでは『1984年』はソ連に原爆を落とさなければならない理由になっていたほどでした。しかし、もちろん、オーウェルのねらいはそんなところにあったわけではありません。アメリカの労働組合の役員であるヘンソンへの手紙の中に「私の最近作の小説は絶対に社会主義やイギリス労働党 (私はその支持者です) を攻撃しようとしたのではなく……」[2]と書き送っています。もうすこしはっきりと、1948年12月に、出版社の重役であるロジャー・センハウスに「私の真の意図というのは、世界を勢力圏に分けることの意味を

検討することで、それに加えて、それをパロディ化することによって全体主義の知的意味を示そうと思ったのです」[3]と答えています。

このねらいは、本国イギリスでは誤解の生じようもなかったし、オーウェル自身も思いもおよばなかったのです。すでにオーウェルは『ウィガン波止場（ピア）への道』（*The Road to Wigan Pier*,1937）ではっきりと、「逆説的ではあるが社会主義を弁護するためには、まずそれへの批判から始めなければならない」[4]と書き、この本はレフト・ブック・クラブ[5]の選定図書になっており、オーウェルの立場ははっきりしていたのです。

しかし、かかる手紙やそれまでの著作にもかかわらず『1984年』は、どんどんひとり歩きをし、誤解が続き、そのためこれは単なる反共の書とか、今年あたり[6]は悪魔の管理社会を描いたのだとかとなることもあり、結局、未来に対する絶望の書とか予言の書などと受け取られてしまうことになるのです。

次に、表現方法に注目すべきことが『動物農場』（*Animal Farm*,1945）のウクライナ版の序文に書かれています。『動物農場』は「誰にでも容易に理解でき、他国語にも容易に翻訳出来るような物語で……」[7]と書いて、ねらいと表現方法をはっきりさせています。

『1984年』は『動物農場』とちがい、「全体主義の知的意味を探りだす」ことをねらいとし、これは別の言葉では、政治思想を解明しよう、あるいは自ら創りだそうという壮大なテーマを持っていたのです。オーウェル自身も、1947年5月に出版者のウォバーグへの手紙の中に「単なる未来小説なら比較的書きやすいのですが」とつけ加えて、これは「つまり、ある意味ではファンタジーだが自然主義の形をとった作品」[8]としたのです。オーウェルにはどうしても警告しなければならないことがありました。そのための方法はいろいろあるでしょうが、小説で、それもリアルに人間がお互いの全存在、全知能を傾けて闘う姿を目のあたりに見せるために形式が一番効果的だと思ったのです。

そのねらいは的中しました。ことに自分がまさにその情況にいると思っている人には一番そのことがわかりました。バーナード・クリックは『オーウェルー

ひとつの生き方ー』(*George Orwell:A life*,1980) の注にも引用しておりますが、ポーランド共産党からの脱退者で詩人のチェスラーフ・ミウォシュは彼のエッセイ集『捕われた魂』(*The Captive Mind*,1953) に、ポーランドではこの小説は「手に入れるのが難しいこと、持っていることが危険なために党中核の幾人しか知られていないが、この作品が自分たちの身近な真実の姿と鋭い観察がしてあること、そしてそのスィフト的風刺」に感心して、「寓話は本来意味が多様であり社会主義リアリズムの規則と検閲官の要請を破るかもしれない」[9]と書いています。これこそオーウェルがねらっていたことなのです。もっともこの文は1953年に発表されておりますのでオーウェルは見ることができませんでしたが。

繰り返しになりますが『1984年』は、自然主義的手法を用いることによって、その世界に自分の姿を投影することができますが、『動物農場』のような寓話では、対象を客観化してしまって訴えが弱くなってしまいます。そこから引き出される結論としては、『1984年』は『動物農場』の深化・発展した形式を持った作品として、それ以上に高く評価しなければならないと思うのです。

2　オーウェルの読者への挑戦

『1984年』の世界は、それこそ蟻の這い出る隙間もない、監視・統制された世界です。眠っている時呟く言葉、ちょっとした顔の変化も、妻や子にたいする時でも監視されています。考える自由も拘束されています。それどころかニュースピーク (Newspeak) では、古い意味の「自由」もなくしてしまいます。自由という言葉のないところでは自由の概念さえなくなるからです。そして過去にまで手を伸ばされ換えられてしまいます。そのため人間の記憶まで管理されます。象徴的な数式である２＋２＝　は党の命令によって４ではないのです。

そういう世界に死を覚悟して反逆した主人公ウィンストンは、その死さえも党を憎みながら死ぬ意義も与えられず、反対に愛情を感じ、感謝しながら死なねばなりません。

読者は、作者オーウェルさえもが、あらゆる点で周到に考え抜かれた完璧な権力抑圧機構の中で絶望してしまったのかと思わせるほどです。日本でも最初に翻訳・紹介した吉田・滝口氏の解説でも「二十世紀最大の絶望の書」[10]といっています。そうなのでしょうか。オーウェルは絶望などしていません。『1984年』が出版される三か月前、オーウェルは友人のリチャード・リースへの手紙の中で、共産主義・ファシズムの類に対抗するには、こっちも同じ程度の狂信を身につけなければならないという意見に反対して次のように書いています。「自分自身が狂信者になるのではなく反対に知性を使うこと－また人はそれによって狂信者を敗北させうると思われる」「人が虎を殺しうるのは人が虎と異なって自分の頭を使ってライフル銃を発明する（虎には不可能）からです」[11]。これは、虎、すなわち『1984年』の世界では「オブライアンを代表する権力機構に対抗するには、虎が絶対使えないものを使って倒せ」といっているとすることができます。さあ、その方法を考え出しなさい、とオーウェルは私たち読者に挑戦しているのです。

3　マスカレードの世界

私は『1984年』を読んではオーウェルの描き出した権力機構に対抗する方法を考えて、その方法がこの小説の中で、「そんな方法では駄目だ」とオーウェルにあざ笑われる思いをしたことが何度もあります。それほどオーウェルは鉄壁を思わせる武装をして私たちの知性に挑戦しているのです。この作品は、そういう意味では寓話でも風刺でもないのです。

先年、日本でも評判になりましたが、キット・ウィリアムズは『マスカレード（仮面舞踏会）』[12]という本をだして、その本の中に隠された謎を解くことによって素晴らしい宝石の隠し場所が見つけられると読者に挑戦したことは記憶に新しいと思います。

私はこの『マスカレード』が出版されて以来、『1984年』という小説も一種のマスカレードではないかと思うようになりました。別の言葉で言えばマスク

（仮面劇）の一種と考えられるです。こう考えると『1984年』の人物が類型的すぎるという批判も、登場人物はマスクをつけた象徴と考えれば当然のことなのかもしれません。そしてオーウェルは「いろいろ謎解きの鍵を小説の中に隠しておいたからそれを見つけてマスクの中の真実の顔を見つけなさい」といっているのです。これは突飛な考えでしょうか。

オーウェルが文芸部長をしていたトリビューン（Tribune）の「私の好きなように」（“As I please”）の欄では、なぞなぞ遊びがかなりあります。そして読者に頭の体操として、別の言葉で言えば、知性を試しているのです。

一つ紹介いたします。シェークスピアの悲劇『アテネのタイモン』からの引用として、次の一節に三つの誤りがあります、さて何処ですか？と問いかけています。[13]

Come not to me again, but say to Athens,
Timon hath made his everlasting mansion
Upon the beached verge of the salt flood,
Who once a day with his embossed forth
The turbulent surge shall cover.

二度とここへ来るな、アテネの連中にこう言え
タイモンは波のうち寄せる海辺に　永久の館をこしらえたと
騒々しい荒波が押し寄せて
泡立つ白波をかぶせるのだ

（八木　　毅訳）

オーウェルはこのパズルの答[14]を翌週の欄に出しています。

私は『1984年』をマスクあるいはマスカレードだと呼びましたが、こんなことが批評の世界で許されるのでしょうか。ここに非常に注目すべき意見をウドコックが彼の著書『クリスタル・スピリット』（*The Crystal Spirit*,1966）の中で紹介しています。それはジョン・ウェインの「オーウェル論」の中にある

のです。オーウェル会[15]の奥山先生の訳をお借りしますが、ジョン・ウェインは「多くの現代の批評家は批評の対象となるものすべてを『表現形式（ジャンル)』の面から論じるが、オーウェルの作品をこの面から論じるのは適当でなく、ルネッサンス期の批評家のようにその内容がどういう『内容（カインド)』に属するものかを考えるべきだ」として「オーウェルの作品はどういう『内容(カインド)』のものなのかというと『論争（ポレミック)』なのだ」となります。だからウェインは「オーウェルは『論争的作家（ポレミスト)』であり、彼の作品は『論争（ポレミック)』のための作品なのだ」[16]と言っております。ですから私がさきほど『1984年』はマスクあるいはマスカレードであり「マスクの中を当てろ」という挑戦ー別の言葉で言えば、論争を挑んでいるーと受け止めてもあまり突飛ではありません。これはトマス・モアの『ユートピア』、ホッブスの『リヴァイサン』、マキュアベリの『君主論』などと同じ「内容(カインド)」なのだと言えると思うのです。これは私だけでなく『オーウェル』を書いたクリックも次のように書いています。「彼は政治的思索の傑作を書いたのである。『1984年』は二十世紀にたいして、トマス・ホッブスの『レヴァイサン』の十七世紀にたいするのと同じ関係にある。ホッブスが専制的権力の性格を明らかにし、これを正当化しようとしたのとまったく同じように彼は全体主義的権力の性格と可能性を明らかにし、そればかりかそれをパロディ化した。」[17]

4 謎 解 き

作家の開高　健氏は『オーウェル著作集（第4巻)』（平凡社版）の解説、「権力と作家」[18]の中で、作家特有の鋭い感性でもって、『1984年』の異端糾問官としてオブライアンがあまりにも完璧なものだから、逆に「彼は空虚な仮面者なのではないかという疑いを感じる」として「これがもし誰しも感じるところであるならば、オーウェルは一つの謎を指紋をつけないで残していったことになる」と書いています。

さてこれから、開高氏の「謎」にたいして、オーウェルの言う「虎」にはできないものは何かについて、お粗末ながら私の「知性」を使ってその答を、すなわちオーウェルの提出した『1984年』の権力抑圧機構に対抗する答を見つけなければなりません。もちろん、第一の答は、このような世界をよびこまないために、全体主義権力を充分に把握して、全力を尽くさなければならないということであり、そのためにこそオーウェルはこの作品を書いたのですが、すでにそういう情況にあるところではどうするかという問いに答えなければならないのです。

私は『1984年』は一種のマスク（仮面劇）だとしたのですが、このマスクの特徴の一つは、一つの象徴的なマスクを着けることです。オブライアンは最初から最後まで、狂気とまで言える知性を備えた「権力の司祭」として完璧に演技します。ところがただ一つだけこのマスクが、いわば象徴的な演技から人間的な行動を見せるところがあります。それはウィンストンに拷問を加えて洗脳している時に見せる「疲れ」なのです。この「疲れ」は何処からきて何を表しているのでしょうか。これがオブライアンの弱点か、と答を見つけた思いをしますと、作者オーウェルはオブライアンに「個人というものは一つの細胞にすぎない。細胞の疲労が有機体全体の活力となる。爪を切っても死ぬわけがない」と語らせて、逆に党の永遠性を論証して付け入る隙を見せません。

A　ガンジーの抵抗

ここでいったん『1984年』から離れ、ほぼ同じころオーウェルによって書かれた「ガンジーについての感想」（“Reflections on Gandhi”）に視点を移してみましょう。ガンジーについてオーウェルは非常に面白いことをいろいろ書いていますが、ここでは全体主義世界での抵抗に論をすすめたいと思います。

オーウェルはガンジーが、非暴力闘争について先の大戦の時のユダヤ人を引き合いに出して次のように質問された時のことを紹介しています。

「ユダヤ人についてどう思うか？彼らが皆殺しにされるのをただ座って視て

いる覚悟なのか？もしそうでないとしたら戦争に訴えることなしに彼らをどうやって救うつもりなのか？」というものでした。オーウェルの『1984年』と同じような情況の中での抵抗はどうあるべきなのかという、非常に重要な問い掛けであるのです。それにたいしてガンジーの答は「ドイツのユダヤ人は集団自殺を遂げるべきであって、そうすることによりドイツ人民の注意を喚起することになっただろう」というものでした。さらにオーウェルは「1942年、ガンジーが日本の侵略にたいする非暴力的抵抗を主張したとき、彼はそれによって数百万人の人命が失われるかもしれないことを認める覚悟だったのだ」[19]とも言っています。しかし世界の人々がそのことを聞く機会のないところではどうか、あるいは相手が狂人であった場合はどうか、とその有効性について疑いを述べていますが、オーウェルはガンジーの抵抗の態度の本物さに注目しているのです。

さて『1984年』の世界にもどりますが、かかるガンジー的抵抗であるユダヤ人は集団自殺すべきであったという死の「質」、そして日本軍に対する抵抗の何百万人という死の「量」という形はまことに激しいものですが、それだけの必死の覚悟をオーウェルは答としたのではないでしょうか。そしてまたウィンストンへの拷問を二段階にしたとき、最終段階のビッグ・ブラザーへの愛情を感じ、感謝して死ぬ前に、まだビッグ・ブラザーへの憎しみの残っているときがその死ぬ時期であるとまで考えたのかもしれません。そしてそのことが支配者への打撃となるとオブライアンの「疲れ」は物語っているのかもしれません。

これまで私は『1984年』から離れて、オーウェルがあちこち書き残した謎を解く鍵のうち、ガンジー論の中に見えた「死」をも組織化して抵抗する、聖者に近い指導者による権力機構への抵抗の可能性を追ってみました。

ガンジー論はオーウェルの文章には珍しく、かなり自分の意見をせいぜいほのめかす程度に押さえているとことから、かえってボタン戦争下の全体主義の出口のない情況への抵抗の方法に苦闘している様子が読み取られます。「すくなくとも解決の道は非暴力」であることは、オーウェルも認めたのです。そしてガンジーの平和主義は「その動機は宗教的であるが彼はまたそれが一定の技

術であり、方法であって望むべき政治結果を生み出しうるものであるとも主張した」[20]とも述べており、このことは宗教と政治の連係の可能性を示したともとれ、やはり先程の抵抗を有効に組織する指導者の姿を暗示しているようなのです。

B　プロレの勝利

最後に私は『1984年』の世界そのものの中にオーウェルの提出した問題を解く鍵を捜して締めくくりとしましょう。

主人公ウィンストンが危険を冒してまで人間性回復の証として日記を書いた最初の日では、一人称の「私」は小文字のｉとなっており非人間化してしまった姿を見せています。次の日記の売春婦のことを書く時期から「私」は大文字のＩとなって人間に復帰した印となっています。書くことは一つの大切な行為であるわけです。ジュリアがウィンストンに渡した紙切れのI love you. のＩは大文字でした。

さて、内部党のオブライアンは「私」をどう書くのか、あるいは全然書かないのでしょうか。オーウェルの仕掛けたちょっとした罠です。オブライアンには「私」を語ることがあっても、書くことはないはずです。なぜなら、過去や事実を改編し、二重思考の世界はオブライアン自身の言う「集団的唯我論(collective solipsism)」の世界なのです。関東学院大の小滝先生は、この集団的唯我論について「自己の意識を通じてのみ存在を認識するのが唯我論なら集団的ということはありえない。これは詭弁だ。ウィンストンはこの詭弁に気がつかない」[21]と述べられていますが、そうではなく、これこそ「私」を完全になくした「権力への陶酔感のみを共有する集団」となることを意味しているのです。だからオブライアン自身が描く将来の姿は「好奇心も、生きているうえでの感じるいかなる喜びもない、芸術も文学も科学もない」異端者狩りを続けることによって「権力への感覚を研ぎすます世界」なのです。

これは権力を神に置き換えれば、それがどんな世界か想像がつきます。そこ

で私にはゴヤの描く「我が子を食べるサトゥールヌス」の絵を思い浮かべてしまうのです。サトゥールヌスは、天空の支配権を我が子に奪われるのを恐れ、五人の子供を次々に食い殺していった古代神話の神なのです。土曜日の、つまり、魔女が集会を開く日の神であり、人間である以上、絶対に逃れ得ぬ運命、時間、死、そして夜の闇の象徴でもあるのです。

内部党の集団は、プロレ階級とはもちろん、外部党の者とも完全に人種（種族）が違ってしまうのです。権力のための権力は確かに維持したとしても、古代の、犠牲を捧げ神に仕えた集団と似たものと化してしまうのです。

ところでオブライアンはウィンストンに「お前のものの考え方は私のに似ている」と言って、ウィンストンとの共有部分が多くあることを示唆します。ウィンストンの気持ちが手に取るように分かるのも、ウィンストンがオブライアンにひかれていったのもそのせいなのでしょう。だが二人が選択した世界は違うのです。一つはオブライアンの集団的唯我論の世界、もう一つはウィンストンの人間的世界なのです。別の言葉で言えば、神か人かの選択をしたということになります。このことは「ガンジーについての感想」の中に見える、オーウェルの「人は、神か人間とのいずれかを選ばなければならない」とか「人間であることの本質は……他の個々の人間に対して愛情を注いだ当然の代償としてついには人生に敗れて破滅する覚悟を持っていることだ」[22]という議論に発展していくことになります。すなわち、オブライアンの「疲れ」は、人間のままに留まっているウィンストンに対して、神を選んだ己と、その集団の将来を、知性の塊であるオブライアンが充分認識していることからきているのではないでしょうか。

それに引き替え、プロレ階級はウィンストンが希望を託した人間的精神そのものです。クライム・ストップもブラック・ホワイトも必要としない人々、子供にそんな残酷なシーンは見せるなと叫ぶナイーブな精神を持った人たち、過去を大切にする人たち、さらにまた敵の爆弾を的確に予知する能力を持った人たちです。その能力は、ウィンストンがプロレ階級と接触して初めて気がつく

能力です。支配者には、全然見えない、こういった能力がプロレ階級には多いはずです。権力者が支配していると思っても支配され得ない人々です。先ほど紹介した「虎」には不可能なことなのです。これこそが、開高氏の言う指紋もつけないで残した謎、オーウェルが知性を使って「狂信家」を敗北させうるとした対抗策への鍵なのではないでしょうか。

結論としては、平凡なことですが、まだまだ未解決の部分は多いとはいえ、死をも組織化させうるガンジー的抵抗の真剣さと、人間的なものに限りなく執着してその人間のあらゆる能力を総動員する知力こそが、『1984年』の世界、ひいてはそれに似た現実の世界への対抗する方法だということになるのではないでしょうか。

最後にオーウェルが紹介しているなぞなぞ遊びでもって私の発表を締めたいと思います。「動物の中で、今まで一番賢いものは？」それにたいする日本の賢者の答、「人間の眼に触れなかった動物だ」。[23]有効な武器は「権力の司祭」たちには見えないものでしょう。

オーウェルの取り組んだ政治と文学は、いつまでも、謎を、論争を、提出し続けることでしょう。

有り難うございました。

［註］

1）George Woodcock, *The Crystal Spirit* (Little, Brown, 1966) 奥山康治訳『オーウェルの全体像－水晶の精神』(晶文社) p.67 (Schocken Edition, 1984. p.53).

2）*The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell* (Penguin Books) Vol.Ⅳ, p.564.

3）Ibid., p.520

4）*The Road to Wigan Pier* (Penguin Books), p.151.

5）John Lewis, *The Left Book Club－An Historical Record* (Foreword, Dame Margarat Cole, 1970) 鈴木建三訳『出版と読書』(晶文社)に詳しい。

6）この小論は1984年９月に新潟大学英文学会に口頭発表したものである。

7) *CEJL*, Ⅲ, p.458.

8) *CEJL*, Ⅳ, p.378.

9) Bernard Crick, *George Orwell: A life* (Penguin Books), p.638; Jeffrey Meyers, ed., *George Orwell—The Critical Heritage* (Routledge & Kegan Paul, 1975), p.286.

10) 吉田健一、龍口直太郎訳『一九八四年』(文芸春秋社, 1950)

11) *CEJL*, Ⅳ, p.539.

12) Kit Williams 坂根厳夫訳『マスカレード—仮面舞踏会』(角川書店, 1981)

13) *CEJL*, Ⅲ, p.324.

14) Answer to last week's problem. The three errors are:

(a) The 'who' should be 'whom'.

(b) Timon was buried below the high-tide mark. The sea would cover him twice a day, not once, as there are always two high tides within the twenty-four hours.

(c) It wouldn't cover him at all, as there is no perceptible tide in the Mediterranean. *CEJL*, Ⅲ, p.333.

15) 日本英文学会第49回大会が明治学院大学で催されたとき、オーウェル好きが5、6名集まり一種の談話会ではじまり、活動の一環として『オーウェル研究第1号』を1982年に出版して以来、現在第13号発刊まで継続している。会員によるオーウェル関係の研究書、翻訳書多数出版。オードリィ・コパード、バーナード・クリック編『思い出のオーウェル』(晶文社)を共同訳し、第22回日本翻訳出版文化賞を受賞。事務局早稲田大学9号館 奥山研究室。

16) Woodcock, p.188. 奥山, p.227.

17) Crick, p.398.

18) 開高健『今日は昨日の明日—ジョージ・オーウェルをめぐって』(筑摩書房, 1984)に収録。

19) *CEJL*, Ⅳ, pp.528-529.

20) Ibid., p.528.

21) 小滝奎子『ジョージ・オーウェル研究—その行動と精神』(八千代出版, 1980) p.263.

22) *CEJL*, Ⅳ, p.527.

23) *CEJL*, Ⅲ, p.405.